効果的なプレゼンテーション教授法に関する研究

Study on Effective Presentation Teaching method

池村 努[*1]
Tsutomu IKEMURA[*1]
*1 北陸学院大学短期大学部コミュニティ文化学科
*1 Community and Culture Department, Hokurikugakuin Junior College
Email: ikemura@hokurikugakuin.ac.jp

あらまし：前回の事例報告では，分析力，情報発信力，プレゼンテーション能力向上を目的としたプレゼンテーション授業に，ルーブリックを導入した相互評価の取り組みについて紹介した．ルーブリックを用いることで相互評価に客観的視点を取り入れることができた．本報告では前回の報告後に行った評価基準の見直しと，授業実施方法について改善を内容について報告する．
キーワード：プレゼンテーション，ルーブリック，相互評価，アクティブラーニング，

1. はじめに

プレゼンテーション能力は大学教育において，また社会人教育においても重要度が増しつつある．今回は授業実践の内容についてまとめ，改善に向けた取り組みに繋げる予定である．本研究では課題作成ー発表における一連の流れの中で，評価方法を改善することにより，効果的なプレゼンテーション教授法の構築に繋げる．

2. 研究概要

今回の研究は，2013 年度から 2014 年度にかけての「プレゼンテーション演習」「プレゼンテーション応用」履修者を対象として行った．本研究の前段階として，プレゼンテーション技能を学習する授業「プレゼンテーション演習」における，効果的な相互評価方法の構築について研究を行っている．同研究では，ルーブリックを用いた評価や，WEB アンケートを用いた評価，記述式の評価表を用いた評価などについて検証を進め，改善方法などについて考察を行ってきた．今回はさらに深めて，プレゼンテーションを構成する要素について検討し，それぞれについての効果的な教授方法について提案を行う．

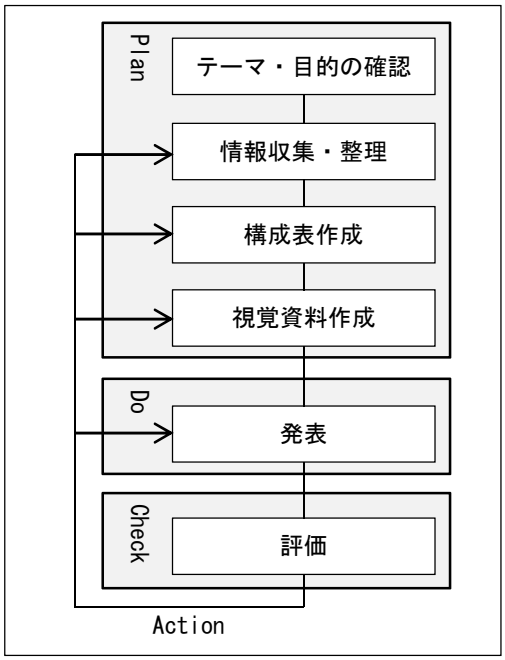
はじめに，プレゼンテーションの重要なポイントについて要素の再確認を行った．プレゼンテーションの要素は大きく分けると，資料作成と発表の２項目が考えられる．資料作成では，プレゼンテーションの焦点を明確にすることと，伝わりやすいように内容をまとめることが重要となる．そのための手順について確認した．次に発表時の注意点についてまとめた．特に注意して教授したポイントとして，非言語コミュニケーション領域について取り上げる．文章化されたものをただ読み上げるだけでなく，いかに聞き手に伝えるかというポイントについて確認を行った．

これらを元に効果的なプレゼンテーション教授法についての研究を行い，構成表の作成と発表のフィードバックについての取り組みについて確認を行った．

3. プレゼンテーション要素の確認

「プレゼンテーション演習」で用いたテキストを元に，プレゼンテーションにおける要素を確認した．プレゼンテーションを構成する要素には大きく分けて資料と発表がある．さらに資料作成にはテーマに基づいた構成表作成とパワーポイント等の視覚資料作成に分けられる．また資料を作成しただけでは完成とならず，リハーサルを行った後のフィードバックも重要である．授業で使用しているテキストを元にプレゼンテーション資料作成の手順を図１にまとめた．PDCA サイクルに基づいたフィードバックにより，プレゼンテーションの内容がより良い物になる．フィードバック先は情報収集から発表の技術まで多岐にわたっている．

図１ プレゼンテーション資料作成手順



このように，プレゼンテーションには複数の要素が絡み合っていることがわかる．次章では要素毎の教授方法について現在取り組んでいる手法と課題について確認を行う．

4.　教授方法の現状と課題

4.1　Plan

課題を課す際にはテーマと共にプレゼンテーションの目的と，ターゲットを明確にする．プレゼンテーションには「情報を伝える」「説明をする」「説得をする」という三つの目的別タイプがある．始めにこれを明確にすることによって，学生自身がどの様なプレゼンテーションをすべきかを考え決定することになる．

情報収集に続いて構成表を作成する．構成表には発表の目的やテーマなどの項目が掲載され，アウトライン－本論－タイトル－結論－序論の順で作成するように指導している．構成表はプレゼンテーションのベースとなるものであるが，箇条書きで仕上げることで，完全に読むことのできる原稿とならないように注意を与えている．これは，手元原稿を朗読する習慣を付けさせないようにできる効果もある．また構成表が発言のためのメモになるため，対象に合わせた言葉遣いができるよう，用語や言い回しについての注意を払うよう指導をしている．

構成表ができあがったら視覚資料を作成する．文字のバランスや色彩にも注意を払うよう指導を行っている．文字については手元資料と投影資料の違いについて強調して説明している．プレゼンテーションソフトによっては，テーマを選択すると自動で選ばれるフォントが投影に向かないものなどもあり，実際に体験させる事で確認をさせている．またアニメーション効果については付けすぎることで逆にポイントが散漫になる恐れがあることから，最小限の使用に留めるよう注意をしている．

4.2　Do

発表で注意すべき点は，非言語コミュニケーションチャネルの使い方である．先に触れたように，完全に読むことのできない原稿を用いることで，聴衆への気配りができなくなることを防ぐ効果が期待できる．

次にパラ・ランゲージ（周辺言語）についての注意を与えている．効果的な発表を幾つか例示し，一本調子にならないようメリハリのある発表を心がけるような指示を行っている．

1 対多で発表を行う際には，一グループが 10 名以下になるよう調整を行っている．教室環境の問題などもあるが，アクティブラーニングスペースを用いて，2 箇所で同時にプレゼンテーションを行うなどの工夫をした．

4.3　Check

発表を行ったら，振り返りを実施する．振り返りには聴衆がルーブリックに基づいた指摘を行う「相互評価」，発表の様子を録画して後から確認する「自己評価」，自分でルーブリックをもとに評価をする「自己評価」を利用している．

相互評価については以前 WEB アンケートを用いた方法について報告を行った．その後口頭での評価や，少人数グループに分かれての評価等，幾つかの方法を試している．また，「発表者が一番訴えたかったこと」が何かを聴衆が応えるという試みも 2014 年度から取入れている．発表の骨格作りの際できていて当然とも言えることだが，評価を行った結果，主張と理解に少なからずギャップが生じているケースがあった．

4.4　Action

振り返りを受けて，資料の修正を行う．修正は図 1 に示したように，資料収集から発表まで全てに渡って行われることになる．この課程を繰り返すことによってより完成度の高い発表を行うことが可能になると考える．

4.5　課題

資料作成時，十分に課題に対する調査と整理を行わず，短時間でパワーポイント作成に入る傾向のある学生がいる．この場合，発表の段階で指摘することで，再度調査を行うことになるが，時間的なロスが少なからず生じ，指導上の課題となっている．

相互評価を行うと，少なからず何も発言しない学生が散見される．また発言しても「よかった」など具体性に欠ける発言の場合がある．これらを減らし，積極的に発言させることが求められる．積極的に加わることのできる相互評価の方法を検討したい．

5.　評価項目の改善

これまでに評価項目の検討を行ってきた．その評価対象は基本的に完成されたプレゼンテーションに対するものとなっている．ルーブリックを用い，資料と発表について幾つかの項目を設けてプレゼンテーションの評価を行っている．また相互評価においては発表視聴時にコメントを残し，発表後に意見交換を行っている．

今後の改善方策として，資料作成中にも評価を行い，改善に結びつける方法が期待される．そのための提案として完成後に確認するためのルーブリックだけでなく，作成時に参照するツールを提案する．これにより今回明らかになった「手抜き」資料作成の軽減を図る．

6.　今後への展望

これまでは効果的なプレゼンテーション教授法として，少人数でのプレゼンテーション授業の提案を行ってきた．ところが今年度は 30 名を越える学生が履修したため，少人数クラスとするため，2 回に分けて授業を行った．今後プレゼンテーション能力が社会において要求されるようになると，より多くの学生が履修することが考えられる．そのためには，少人数クラスで得られるのと同じ程度の効果を，多人数クラスでも実現できるような工夫が求められる．評価方法の改善により，多人数への対応を実現していきたい．

参考文献

森脇道子,武田秀子編著:“ビジネスプレゼンテーション.実教出版”（2011）